【研究レポート】

3歳未満児への絵本の読み聞かせについての保育者の意識
－絵本にまつわる保育のエピソードからの分析－

大　元　千　種

【要旨】

本研究では、保育者が３歳未満児との絵本の読み聞かせにおいて、何を大切にしているのか、また、子どもが絵本の世界をどのように自分のものとして表現していくのかについて、保育者による「絵本にまつわる保育のエピソード」のうち３歳未満児を対象とした37名分からの気づきをもとに分析を行う。３歳未満児は体を通して五感を使って絵本の世界を楽しむという保育者の気づきと、くり返し同じ絵本を読むことの重要性についての気づきが多かった。同じ絵本を何度も読み聞かせすることによって、子どもたちは内容も言葉もわかっていくため、次のページを予想し、その期待が裏切られない安心感を得ることができる。その安心感に裏づけられて子どもたちは新たな発見や楽しみ方をすることができる、さらにその絵本が好きになり、絵本の言葉や音、動作、世界観をわがものとしていっている。３歳未満児対象の絵本の読み聞かせでは、保育者も楽しみながらおおらかに子どもの様子を受けとめていく必要があり、絵本を読むというより絵本を楽しみ遊ぶことが大切だといえる。

１．目的

集団保育では、どの年齢においても絵本の読み聞かせが行われている。保育所保育指針や幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領に示されるように、絵本の内容と自分の経験とを結びつけることや言葉遊びを楽しむことなどをとおして、子どもたちのイメージや言葉の感覚が育まれ、生活の中で使う言葉が豊かになっていく。絵本は保育において重要な役割を果たしているのである。

しかし、絵本の内容と自分の経験とを結びつけることや言葉遊びを楽しむということが発達的に難しい子どもも多い３歳未満児保育においては、絵本はどのような役割をもっているのであろうか。保育所保育指針の乳児保育では、「身近な生活用具、玩具や絵本などが用意された中で、身の回りのものに対する興味や好奇心をもつ」とある。１歳以上３歳未満児の保育では、「言葉」の「ねらい」に「絵本や物語等に親しむとともに、言葉のやり取りを通じて身近な人と気持ちを通わせる」とあり、その「内容」に「絵本や紙芝居を楽しみ、簡単な言葉を繰り返したり、模倣をしたりして遊ぶ」とある。

０歳児の「興味や好奇心」が１歳以上の絵本をもとにした保育者や友達のやりとりや模倣につながっていくためには、低年齢児ならではの保育者の絵本の読み聞かせについての配慮や工夫が行われていると考えられる。

田代（2001）[1]は、父親が絵本を１ページめくっては10ヶ月の息子に話しかけ、絵と同じ動作をして、二人で笑っている様子を見て、一緒に絵本の絵を楽しむことや話をすることの大切さに気がついたという母親の新聞投書（1992年４月29日「朝日新聞」）を例に引きながら、おとなも子どもと絵本を一緒に楽しんで遊ぶことを勧める。「子どもは絵本の読み聞かせで絵本そのものを楽しみながら、同時に大好きなおとなといる幸せを感じている」と述べている[2]。

寺田・無藤（2000）[3]および寺田（2003）[4]の研究では、３歳未満児を対象とした集団の場面分析研究は見られないことから、２歳児対象の絵本の読み聞かせの分析が行われている。それによれば、２歳児は集中時間が短く、絵本の最後までを楽しむより、１ページその場を楽しむことが多いことや、子どもの集中が切れたときに保育者が子どもを見つめたりジェスチャー

したりすることが有効であることが明らかにされている。また、大元（2001）[5] は実践記録の分析から、２歳児たちが絵本や図鑑を通して自分の経験や興味､好きなものにさらに深く関わっていくことや保育者が子どもたちとともに楽しんでいることを示している。

以上から、３歳未満児の絵本の読み聞かせにおいては、子どもの年齢発達ならではの保育者の読み聞かせの工夫があることや子どもたちは保育者や他の子どもとのやりとりを楽しみながら興味のあるものについての認識をいっそう深めていくことが見えてくる。何よりも子どもは絵本を読んでもらうことで幸せを感じ保育者自身も子どもとの絵本の読み聞かせを楽しんでいることが推測できる。そこで、本研究では、保育者が３歳未満児との絵本の読み聞かせにおいて、何を大切にしているのか、また、子どもが絵本の世界をどのように自分のものとして表現していくのかについて、保育者による実践からの気づきをもとに分析を行う。

２．方法

調査の手続き：絵本についての研修会にて受講者に「絵本にまつわる保育のエピソード（以下エピソード）」の利用に関する説明（利用目的、個人情報の取り扱い、エピソード提供の任意性）を文書で行い、事前記入した同意書とともにエピソードの提供を得た。

受講者54名のうちエピソード提供者は43名であった。そのうち、37名が３歳未満児を対象としており、６名（内１名は孫）が３歳以上児を対象としたエピソードであった。今回は３歳未満児のエピソード37件の分析を行う。

調査日（質問紙回収）：2021年11月11日

対象者（エピソード提供者）：保育者 37名

対象者の所属施設：地域型保育事業所 30名、公立保育所 ４名、不明 ３名

３．結果

エピソードの絵本と子どもの年齢や人数および読み聞かせの期間は、表１のとおりである。

（１） 絵本にまつわる保育のエピソードにあげられた対象児について

１） 対象児の年齢

表１に示すように、絵本の読み聞かせの対象は単年齢児だけでなく、０・１歳や１・２歳、０～２歳という異年齢児も多い。したがって絵本にまつわる保育のエピソードは37であるが、子どもの年齢は、０歳が10、１歳が29、２歳が24である。エピソードの78.4％に１歳児が入っており、64.9％に２歳児が入っている。

表1 「絵本にまつわる保育のエピソード」にあげられた絵本 五十音順 （32種類 52冊）

種類	絵本タイトル	絵本の作者、出版社、発行年	対象年齢	対象人数	読み聞かせ期間	選択数
1	あっぷっぷ	中川ひろたか文、村上康成絵、ひかりのくに、2003年	1･2	10	2021.4～8	1
2	いいおへんじできるかな	きむらゆういち、偕成社、1992年	1	6	年中	1
3	いれてくやさーい	わたなべあや、ひかりのくに、2019年	1	14	2020.8～2021.3	1
4	いろいろばあ	新井洋行、えほんの杜、2011年	1	10	2021.9～11	1
5	いろいろバス	tupera tupera、大日本図書、2013年	1･2	10	2021	2
			1･2	13	2021.7～	
6	おおきくなるっていうことは	中川ひろたか、童心社、1999年	2	6	2021.1	1
7	おしくら･まんじゅう	かがくいひろし、ブロンズ社、2009年	2	5	2020.10～3	1
8	おひざでだっこ	内田麟太郎文、長谷川泰史絵、童心社、2014年	0	5	2021.10～11	1
9	おひさまあはは	前川かずお、こぐま社、1989年	1･2	6	2021.10～11	1
10	おべんとうバス	真珠まりこ、ひさかたチャイルド、2006年	0～2	9	2021.9～	1
11	くれよんのくろくん	ばかやみわ、童心社、2001年	2	8	―	1
12	ごあいさつあそび	きむらゆういち、偕成社、1988年	0･1	4	2021.8～11	1
13	じゃあじゃあびりびり	まついのりこ、偕成社、1983年	0･1	12	2021.9～11	1
14	だるまさんが	かがくいひろし、ブロンズ新社、2008年	1	8	2021.4～11	4
			0～2	17	2021.5～11	4
15	だるまさんと	かがくいひろし、ブロンズ新社、2009年	0･1	10	2021.4～10	4
16	だるまさんの	かがくいひろし、ブロンズ新社、2008年	0～2	19	2020.4～11	4
		かがくいひろし、ブロンズ新社、2008年	1	6	2021.6～11	5
17	できるかな?あたまからつまさきまで	エリック･カール、工藤直子訳、偕成社、1997年	0～2	17	2021.9～10	1
18	どうぞのいす	香山美子、ひさかたチャイルド、1981年	1･2	10	―	1
19	どろんばあ～おばけかぞえうた～	小野寺悦子、福音館書店、2018年	1･2	14	2018～2021.7～8	1
20	どんぐりころころおやまへかえるだいさくせん	スギヤマカナヨ、赤ちゃんとママ社、2014年	1･2	7	2021.1	1
21	どんないろがすき	坂田修、フレーベル館、2021年	2	20	2020.10～11	1

22	ばけばけばけばけばけたくん	岩田明子、大日本図書、2009年	1·2	13	2020.4～2021.11	1
23	ばしゃにのって	とよたかずひこ、アリス館、2013年	1	11	2021.8～11	1
24	バスがきました	三浦太郎、童心社、2007年	0～2	21	2021.6～9	1
25	はらぺこあおむし	エリック・カール、もりひさし訳、偕成社、1976年	2	8	2021.3～4	1
26	ぽんちんぱん	柿木原政広、福音館書店、2021年	0·1	1～10	―	1
27	パンツのはきかた	岸田今日子文、佐野洋子絵、福音館書店、2011年	1·2	4～10	―	1
28	ふーってして	松田奈那子、KADOKAWA、2020年	2	9	2021.8～11	1
29	めんめんばあ	はせがわせつこ文、やぎゅうげんいちろう絵、福音館書店、2006年	1	10～19	2021.4～11	1
30	やさいさん	tupera tupera、学研プラス、2010年	1·2	7	2021.7～8	1
31	やさいのおなか	きうちかつ、福音館書店、1997年	1·2	3～5	2021.5～10	2
			1·2	5	2021.6	
32	わらべうたであそびましょ	さいとうしのぶ、のら書店、2013年	1·2	10	2021.6～11	1
					計	52

2） 読み聞かせの対象人数

エピソードにあげられた対象児の人数は、37エピソードのうち５人以下が６（16.2％）、６～10人が19（51.4％）と、10人以下が６割以上である。その中でも０歳児のみの対象では５人、０・１歳児で４人や１人～10人と、０歳児が入っている場合は少人数である。11～15人が８（21.6％）、16人～21人が４（10.8％）で、特に０～２歳児が対象のエピソードでは17人や19人、21人と大人数となっている。

（２） 絵本が読まれる時間帯と期間

表１には示していないが、絵本が読まれている時間帯（複数回答あり）としてもっとも多かったのは、朝や夕方の集まり時間の25であった。なかには絵本タイムの時間を設定しているところもあった。次に多かったのは、活動と活動の合間で９、ついでおやつや給食、排泄、午睡など生活に関わる時間帯の前後の８、野菜の収穫や製作など保育者が意図した設定活動の前の７、自由な遊びの時間に子どもが絵本を持ってきたときなどの５、みなの注目を集めたいときの１であった。

また、エピソードに上げられた絵本の読み聞かせの期間は３ヶ月～半年に渡っており、なかには２年以上や１年中というところもある。

保育では、毎日そのときに応じて様々な絵本が読まれている。そのなかにはエピソードのように長期間同じ絵本が何度もくり返し読まれることもある。したがって、主活動としての位置づけではないにしても、保育の中で絵本は重要な位置を占めていることがわかる。

（３） エピソードにあげられた絵本

１） 絵本の特徴について

エピソードの絵本は保育者からそれぞれ１冊あげられた。これらの絵本の特徴を表２に示す。ただし、『だるまさんが』、『だるまさんの』、『だるまさんと』がセットでエピソードに記入（以後、『だるまさん』シリーズ）されていたため、エピソードは37件であるが、絵本の総数は52冊である。同じ絵本のエピソードもあったため、種類としては32種類である。

表２の項目の「くり返し」には内容や言葉のくり返しを含む。「言葉」にはオノマトペや特徴的な言い回し、歌などやCD付の絵本を含む。「人」には赤ちゃんやお母さん、子どもも入る。「おばけ」にはカッパや鬼、人魚を含む。

３歳未満児対象の絵本としてはくり返しや鮮やかな色使いが28件（87.5％）と多く、動物が出てくる絵本も22件（68.8％）と多い。子どもたちの好きな食べ物や乗り物、おばけなども選ばれている。

２） 子どもの年齢による絵本の特徴

表１と表２およびエピソードから、絵本の特徴を以下の年齢区分で示す。

①０歳児、０・１歳児…イメージと発語しやすい絵や言葉

０歳児や０・１歳児の絵本では、「だっこ」、「ねんね」、「まんま」、「にゃんにゃん」など、０・１歳児がイメージしやすく発語しやすい絵やオノマトペが使われている特徴がある。

①１歳児、１・２歳児…模倣しやすい言葉と動作

１歳児では『めんめんばあ』など、動作と言葉を真似しやすい絵本が選ばれている。また、『やさいのおなか』など、ものの名前や色などの言葉と認識を拡げる絵本もあげられ、名前呼び、野菜の名前当てなど保育者とのやりとりが楽し

まれている。

表２　「絵本にまつわる保育のエピソード」にあげられた絵本の特徴　五十音順

種類	絵本タイトル	くり返し	言葉	色使い	動物	人	食べ物	乗り物	植物	おばけ
1	あっぷっぷ	○	○	○	○	○				
2	いいおへんじできるかな	○	○	○	○	○				
3	いれてくやさーい	○	○	○			○			
4	いろいろばあ	○	○	○						
5	いろいろバス	○	○	○	○		○	○		○
6	おおきくなるっていうことは	○		○		○				
7	おしくら･まんじゅう	○	○				○			○
8	おひざでだっこ	○	○		○	○				
9	おひさまあはは	○	○		○	○				
10	おべんとうバス	○	○	○			○	○		
11	くれよんのくろくん			○	○				○	
12	ごあいさつあそび	○	○	○	○	○				
13	じゃあじゃあびりびり		○	○	○	○		○		
14	だるまさんが	○	○	○						
15	だるまさんと	○	○	○						
16	だるまさんの	○	○	○			○			
17	できるかな?あたまからつまさきまで	○	○		○	○				
18	どうぞのいす	○	○		○		○		○	
19	どろんばあ　～おばけかぞえうた～	○	○							○
20	どんぐりころころおやまへかえるだいさくせん	○	○		○				○	
21	どんないろがすき	○	○	○	○	○	○	○	○	
22	ばけばけばけばけばけたくん	○		○			○			○
23	ばしゃにのって	○	○		○	○		○		
24	バスがきました	○	○	○	○	○		○		
25	はらぺこあおむし	○		○	○		○			
26	ぽんちんぱん	○	○				○			
27	パンツのはきかた		○		○					
28	ふーってして	○	○	○	○	○		○		
29	めんめんばあ	○	○	○	○					
30	やさいさん	○	○	○	○	○	○			
31	やさいのおなか	○	○	○			○			
32	わらべうたであそびましょ		○	○	○	○				
	計	28	28	22	20	14	12	7	4	4

②１・２歳児、２歳児…物語、歌、生活習慣

２歳児や１・２歳児では『くれよんのくろくん』、『どうぞのいす』、『はらぺこあおむし』という物語の絵本が読まれている。また、歌や吹き絵遊びになど、他の保育活動と関係した絵本があげられている。さらに、『パンツのはきかた』のような、子どもの生活習慣の自立にむけた絵本も選ばれている。

③０～２歳児…発語や模倣など年齢に応じた楽しみ方

０～２歳児と年齢幅が広がると、どの年齢の子どもも好きな食べ物や乗り物のわかりやすい絵とくり返しのある絵本が読まれている。読み聞かせによって、子どもはそれぞれの年齢に応じた楽しみ方をしている。また、『だるまさん』シリーズはどの年齢でも読まれ、絵本の言葉と動作が楽しまれている。

（４）　絵本の読み聞かせの保育者の配慮

１）　絵本を選んだ理由

①子どもが好き

保育者が絵本を選んだ理由（複数回答）で一番多かったのは、子どもが好きな絵本だから、あるいは子どもが楽しめそうだからという理由が22件であった。『はらぺこあおむし』や『やさいのおなか』などは子どもから読んでほしいとリクエストがあった絵本である。また、学生時代の実習園で子どもたちが好きだったという『おしくら・まんじゅう』もあげられている。

②子どもが興味をもっている色

上述①の中に子どもが興味をもつようになったからという理由もある。特に色に注目した絵本選定が５件ある。秋の葉っぱを見て「きれいねー、○○色」と子どもたちがつぶやいたり、絵の具遊びを２歳児たちが楽しんだりしている姿をもとに『どんないろがすき』を選んだという記述もあった。年齢的に色や乗り物に興味をもつ時期だから選んだという『いろいろバス』は、実際に１・２歳児が乗り物が好きで色にも興味をもってきたことから他の保育者からも選ばれている。

④子どもにわかりやすい

子どもにわかりやすい絵本、あるいは親しみやすい絵本だからという理由で、『いいおへんじできるかな』や『だるまさん』シリーズなど５件が選ばれている。

④くり返しや音がおもしろい

くり返しや音のおもしろさが理由にあげられているのは４件あり、『だるまさん』シリーズはそのなかにも入っている。『めんめんばあ』や『ばしゃにのって』もあげられている。

⑤子どもに身に付けてほしい挨拶や行為

生活習慣や友達との関係づくりなどを身につけてほしいという意図から選ばれている絵本も５件ある。挨拶や着替えなど身につける時期でもあることから『ごあいさつあそび』と『パンツのはきかた』の絵本が選ばれており、友達と

のやりとりの仕方については、『いれてくやさーい』の絵本が選ばれている。

⑥その他

その他、親子愛が感じられる『おひざでだっこ』や、優しい気持ちを育みたいという思いからの『どうぞのいす』、保育者が好きだからという『おひさまあはは』、季節的な理由からの『どんぐりころころおやまにかえるだいさくせん』、クッキング保育や発表会につなげたい『おべんとうバス』、うた絵本の『わらべうたであそびましょ』、未来への期待がもてるようにという『おおきくなるということは』もある。

このように保育者は様々な理由で絵本を選んでいるが、ただ読み聞かせをするだけでなく、次にあげるように子どもたちと絵本を楽しみながら読んでいることが見られる。

2） 子どもの反応に応えながらやりとりをする

『あっぷっぷ』の「にらめっこ」や『ごあいさつあそび』の「こんにちは」や、『いれてくやさーい』で保育者が「いれて」と読むと、子どもから「いいよ」と応答があるなど、子どもの反応を見ながら言葉や動作を子どもたちと楽しんでいる保育者が多い。なかには『ごあいさつあそび』の登場人物を子どもの名前に変えて読んだりするなど、子どもを絵本の読み聞かせに誘い込んでいる保育者もいる。読み聞かせに合わせて子どもたちは表情やご挨拶、動作なども真似て楽しんでいるエピソードが見られる。

3） 言葉はゆっくりはっきりリズミカルに読む

多くの保育者が、言葉をゆっくりはっきりと絵本を読むことやリズミカルに読むことを意識している。特に、『じゃあじゃあびりびり』、『めんめんばあ』などでは、色や音やのおもしろさが際立つような読み方が意識されている。『ばしゃにのって』では、動物や音によって声色を変えるなど、子どもの興味を引くような読み方がされている。子どもたちも手を叩いたり指さしたり、保育者と一緒にくり返しの言葉を言ったりして楽しんでいる。『バスがきました』では、「チュウチュウ」や「～た」など動物の鳴き声や語尾の真似をし、『どろんばあ』では、絵本をめくると子どもが保育者といっしょに「ばあ」と言って楽しんでいる姿が書かれている。

4） 質問やクイズ形式で子どもとやりとりする

『おべんとうバス』では、「○○ちゃーん」と呼びかけると元気よく手をあげて返事をしたり、「次は誰かな」と質問すると「○○だよ」と答えたり、子どもと一緒に絵本を楽しんでいる。『やさいさん』や『やさいのおなか』などでは、保育者がクイズ形式で読んでおり、子どもたちはじっと見入って、保育者の問いかけに答えたり、次は何が出てくるかを期待したりする様子が見られている。保育者は正解を押しつけず、子どもの発言が違っても否定をしないことも意識されている。子どもは「○○みたいだったね」と予想と違うことに驚き、それを楽しんでいるという記述に見られるように、保育者は子どもの気づきや感情を大切にしている。

5） 絵本の言葉と動作にあわせて体を揺らしたり動作を真似たりしながら読む

『だるまさん』シリーズでは、初めは見ているだけだった0・1歳児たちも、保育者が体を動かしながらくり返し読んでいくと、一人の子どもが体を揺らし始め、他の子どもも一緒に揺らして楽しむようになった姿が記述されている。2歳児が入っている『だるまさん』シリーズの読み聞かせでは、保育者の模倣ではなく保育者がフレーズを言うだけで子どもが動作をするなど、絵本のだるまさんの動作を言葉と一緒に表現できるようになっている。『あっぷっぷ』では、保育者が表情もつけて「あっぷっぷ」と言うのを子どもが一緒に真似たり動物の名前や顔の部分を言ったりしている。

6） 絵本をもとに教材作成や遊びなどで絵本の世界をさらに拡げる

『おべんとうバス』では、ペープサートやフェルトで作った具材をおべんとう箱に詰めて遊ぶなど、子どもたちが絵本の世界をさらに楽しめるような工夫がされている。『ばけばけばけばけばけたくん』では、クリアファイルシアターを作成して、実際にばけたくんの色の変化を楽しむことができるように工夫されている。さらに色を重ねて何色になったかを聞くなど色について学ぶ機会を作ったり、食べ物のイラストを用意して食育につなげたりしている。

（5） 絵本の読み聞かせをとおしての保育者の気づき

子どもの反応を見ながら読み聞かせをしていることから、保育者には様々な気づきがある。

1） 子どもの絵本の楽しみ方についての気づき

①絵本の読み聞かせ場面以外で絵本の世界をイメージして遊ぶ

絵本を読んでいる場面以外でも子どもたちが絵本の世界を自分のものとし、取り込んでいる様子が見られる。たとえば、『ごあいさつあそび』の読み聞かせをしているうちに、０歳児が普段遊んでいるときに挨拶をする仕草をするようになっている。『いいおへんじできるかな』の読み聞かせのときに真似をしていた１歳児が、その後遊びで名前を呼ばれると「あい！」と返事をしたという記述もある。また、『めんめんばあ』でも、１歳児が絵本の読み聞かせに笑いながら保育者の言葉をくり返しており、友達との遊びの中で顔に布をあてて、「めんめんばあ」と言いながらいないいないばあをする姿や、保育者の「○○ちゃんどこかな」を真似て言う子どもの姿も見られている。

『だるまさん』シリーズでは、１・２歳児の遊びの中で保育者が「だ・る・ま・さ・ん・の」と言うと、子どもたちから「め」や「て」と口々に言ったり、子ども同士で「どて！」や「びろーん」と言い合ったり、動きを真似て遊んだりする姿がある。

『ふーってして』では、２歳児が読み聞かせのなかで絵の具の色を「きいろだね」など発言しているが、遊びのなかでも一つひとつのおもちゃを指さして「○○色だね」と言っている姿も見られている。

『どんぐりころころおやまにかえるだいさくせん』では、どんぐり拾いの散歩で見つけた若木を２歳児から「何？」と尋ねられ、保育者が絵本のpp.28-29部分を歌うと子どもが「ニョキ、ニョキ、ニョキ、ニョキ」と言ったり、どんぐりが上から落ちてくるとカラスを探したりと絵本と関連づけている様子が示されている。

②くり返し読み聞かせをすることにより子どもが絵本の世界を自分のものとして表現する

絵本にちなんだ言葉や動作は、自然に子どもからが出てきたり普段の生活や遊びに反映されたりするわけではない。前述の『だるまさん』シリーズの保育者の読み方などのように、保育者が子どもに伝わりやすく工夫して、くり返し絵本を読んでいくなかで、子どもたちが動作や言葉を自分のなかに取り込んで表現するようになっている。

『どんぐりころころおやまへかえるだいさくせん』では、「どんぐりころころ」のメロデーに合わせて読み聞かせをしていることもあって最初から１・２歳児たちが絵本に引き込まれているが、何度も読み聞かせをしているうちに、子どもたちは一緒に歌ったり、ゲンゴロウやザリガニなどの生き物の名前を知りたがったりしている。また、リスのポーズが大好きになり、絵本のその場面で真似てポーズをとったり、どんぐり拾いでもポーズをとったりすることも示されている。

『はらぺこあおむし』の絵本から、２歳児たちが数字や曜日、くだものの名前に興味を示すようになってきたという記述もあった。さらに、卵から幼虫、さなぎ、蝶へと変化することを知り、公園での虫探しをするなかで「ようちゅう」や「さなぎ」といった言葉が子どもから聞かれる。

また、絵本の表紙を見るだけで子どもたちが笑顔になったり、１歳児が『ばしゃにのって』の物語を覚えて、次は○○が出てくると言ったりする姿もある。『いろいろバス』では、くり返し読むことで１・２歳児の着眼点にも変化があり、大人も気づかないような細かいところに子どもたちが気づいているという指摘もある。２歳児が絵本の流れを覚えて、保育者の真似をして絵本を読む姿も見られている。

③園生活が子どもにとって安心できる場であることで絵本を楽しめる

『だるまさん』シリーズで、子どもも月齢が上がり保育園に慣れていくなかで体を揺らしたり発語の発達に繋がったりしているという指摘がある。保育園での様々な安心できる生活や遊びをとおして、他の子どもとの関係ができてくることによって、絵本も楽しむことができるという気づきがある。

2） エピソードをまとめての保育者の気づき

エピソードをまとめて、「どんな気持ちで自分が読んでいるか改めて考える機会になった」という保育者もいたように、保育者自身が絵本の読み聞かせに対する姿勢をとらえ直したことがうかがえる。絵本にもよるが、保育者の気づきとして次のようなことがあげられていた。

①子どもの発語や語彙力、動作模倣や身振り表現などの発達が促される

絵本の読み聞かせをとおして子どもの発語や語彙力、動作模倣や身振り表現などの発達が促されていることを指摘している保育者も多い。『だるまさん』シリーズからは､からだの部位を、『やさいのおなか』では、やさいの名前など子どもたちが言っている。しかし、単に子どもがそれぞれの名前が言えるということではなく、保育者やその他の子どもたちとやりとりしながら発語や身振り動作をすることの楽しさに裏付けられた子どもたちの発言であるという気づきがある。

②想像力を養い情緒を安定させる

子どもたちは絵本の絵や色の魅力、ことばの心地よさを感じとり、想像力を養い、情緒を安定させることにつながっているという。ある保育者は、「０歳児の頃から、言葉のリズムの楽しい絵本に親しむことで、絵本に興味を持ち、自分の宝物となり、大人になってもその記憶やその時の感情は残る。絵本は視覚発達や言葉習得の１つの手立てとなるが、最も重要なのは情操を培うこと。耳からきこえるここちよさから子どもの想像力やワクワク感を育てていきたい」と記述している。ざわついていた雰囲気も、絵本を持ってくると落ち着いて、読み聞かせを期待して待っている子どもの姿から絵本の魅力に改めて気づいたという保育者もいる。

③子どもや子どもの発達によって様々に絵本を楽しむ

絵本の好きな子どももいればそうでない子どももいることや、みんなが喜んで興味をもってくれる本を探すのは難しいという保育者の声もある。その一方で、「子どもによって反応が違うので、予想していなかった反応が返ってくると楽しい」という記述がある。また、ある保育者は、「くり返し読むことで楽しみ、着眼する点も変化していき、長く楽しめる。大人も気づかないような細かいところに気づく」と記述している。同じ絵本でも子どもが注目するところが変わってくることに気づき、それを保育者も楽しんでいることがわかる。別の保育者も、「継続して読むことで絵本を通しての子どもたちの成長が見えてくる。きいた音楽を楽しみ、一緒に声を出し、一体感を味わったり次を待つワクワク感があったり、絵と言葉を結びつけたり、発達とともに様々な楽しみ方ができる魅力がつまっている」と記述している。つまり、絵本の楽しみ方は子どもの年齢や発達によって様々にあり、保育者も子どもの楽しみ方を固定的にとらえるのではなく、様々に受け止めていく必要があることの気づきがある。それとともに、保育者自身が子どもの絵本の楽しみ方を一緒に楽しんでいることにも気づいている。

④子どもは絵本の内容をわかっていても、読み聞かせを楽しみにする

くり返し読んでいると絵本の表紙を見るだけで、子どもたちの顔が笑顔になるという気づきは何人もの保育者から出されている。そのなかに「絵本を見るだけで、次はどんなことがあるか分かった上で一緒に読んだり体を揺らしたりしながら楽しめていることに改めて気づいた」や､「次にこれがくる（待っている）ことが分かっているにも関わらず見たいという気持ちにさせる絵本は素晴らしい」という記述がある。子どもたちは好きな絵本は何度読んでもらっても飽きるどころか期待して楽しむということに保育者が気づき、それを大切にしている。

子どもたちはくり返しの読み聞かせを必ずしも同じように楽しんでいるわけではなく、楽しみ方を変えている。それゆえに何度もくり返し読んでもらう絵本を楽しめるのである。

⑤絵本は一方通行ではなく子どもとのやりとりができる

「絵本はメディアと違い、見ている子どもたちの表情や反応に合わせて読むスピードを変えたり、一方通行ではないものであることを再確認した」や、「TVや動画は子ども自身が受け身になりやすいが、絵本だと表現したり、発したり、

くり返してみたり、自分で絵本をめくって『うわっ』と声も出て喜んだり、わくわくしながら読んでいる姿が見られる」という記述がある。保育者と子どもたちとの双方向で楽しむことこそが絵本の魅力であり、それを大切しようとする保育者の意識が見える。

4．考察

以上より、３歳未満児の絵本にまつわるエピソードをまとめての保育者の気づきから、保育者が絵本の読み聞かせで大切にしていることを次のようにまとめることができる。

・保育者自身が絵本を子どもと一緒に遊び、楽しむ。
・安心できる生活や保育者や子どもたちとの関係があって絵本を楽しむことができる。

また、３歳未満児は体を通して五感を使って絵本の世界を楽しむということや、くり返し同じ絵本を読むことの重要性についての気づきが多かった。そこから、集団保育において３歳未満児が絵本の世界を楽しむ過程は次のように考えられる。

・０・１歳児は、絵本の絵や色とともに保育者のリズミカルな言葉や動作にひかれ、思わず発語し、体を動かす。
・１・２歳児ころになり、子どもは保育者や他の子どもたちと絵本の言葉や動作の模倣ややりとりを共有することを楽しむ。
・何度も同じ絵本を読むと、子どもは次が何か分かっているが、それでも好きな絵本は何度読んでもらっても嬉しい。
・一定期間くり返して読み聞かせすることによって、子どもは絵本の世界をとりこみ、イメージや言葉、認識、動作などがより確かになり、絵本から興味をさらに広げていく。いろいろな絵本にたくさん触れることも大切であるが、同じ絵本をくり返し読み、絵本で遊ぶことが子どもの育ちに重要であるといえる。これは３歳未満の子どもに限らずどの年齢の子どもにとってもいえることである。

初めて読んでもらう絵本に対するワクワク感も子どもに魅力であるが、同じ絵本のくり返しの読み聞かせによって、内容も言葉も子どもたちはわかり、安心して絵本を読むことができる。さらに次のページを期待し、ページがめくられてそのとおりであることによって自分の期待が裏切られない安心感を得ることができる。その期待と安心感が子どもに新たな発見や楽しみ方をする余裕をもたらすと考えられる。それによって子どもたちは、さらにその絵本が好きになり、保育者や他の子どもたちと共有、共感しながら絵本の言葉や音、動作、世界観をわがものとしていくのである。そのことについて多くの保育者が気づき、絵本の読み聞かせの実践をしていることが今回の調査において明らかとなった。

３歳未満児を対象の絵本とした読み聞かせでは、保育者も楽しみながらおおらかに子どもの様子を受けとめていく必要がある。３歳未満児には、絵本を読むというより絵本を楽しみ遊ぶことが大切だといえる。

5．引用文献

1）田代康子『もっかい読んで！　絵本をおもしろがる子どもの心理』ひとなる書房　2001年，p.23
2）田代（2001年），同上書，p.24
3）寺田清美・無藤隆「２歳児の絵本の読み聞かせ場面における保育者の思考と行動」『日本保育学会大会発表論文集』2000年，53，pp.304－305
4）寺田清美「絵本の読み聞かせ場面における子どもの変化」『日本保育学会大会発表論文集』2003年，56，pp.228-229
5）大元千種「絵本に関わる保育の展開における保育者の役割―実践事例をもとにした検討―」『センターレポート』第40号，pp.35-42